

學會の動き

經濟學史學會第一〇回大會

大會は、一九五四年一月六・七日の兩日、關西大學において開催された。日程は第一日午前の總會にはじまり、同日午後および第二日が研究報告會に當てられた。研究報告は、前回と同様に、今回もシムボージウムの形式による共通論題についての報告と個別報告とに分けて行われた。

一、まず第一日午後、共通論題として定められた「經濟學史の方法論」について、相澤秀一（大阪大學）、林治一（神戸大學）、渡邊輝雄（東京經濟大學）、横山正彦（東京大學）、島津亮二（京都大學）の五氏の報告が行われた。

ここでその報告の内容を一つ一つ書きしるすことは、紙數の關係上不可能であり、またそれほど興味のあることでもない。報告の内容が非常に一般的抽象的で、かつエレメンタールなものであったのは、論題の性質上ある程度やむをえないことであつたと思われるが、新たな問題提起というよりは問題の解説と若干の反省が行われたにすぎないといつても必ずしもいいすぎではない。このシムボージウム形式は今後も引きつがれるであらうし、回を重ねることによって、形式の上でも内容の上でも

進歩が期待されるのであるから、ここではその點を中心として報告を書くことにしよう。

まず第一に指摘されることは、報告および討論の全體を通して論點がはっきりしないということである。この論點はもろろ一つであることを要しないが、しかし討論參加者の一人として私がちかちかに受取った印象からいえば、あまりに多岐にわたつた論點は、五時間の長きにわたる共同討論をおそろしく不毛なものとしてしまった感が深い。司會者出口勇藏氏（京都大學）は、論點を五つにまとめて討論の便に供したのであるが、それをもみても報告の内容がいかに廣般で漠然としていたかが推察できよう。

出口氏によって集約された五つの論點というのは、一、經濟學史の方法とは何か、二、研究者の問題意識と經濟との間にどのような交渉があつたか、三、經濟のロゴスと學史の關係いかん、四、歴史のロゴスと經濟研究の交渉いかん、五、經濟科學としての經濟學と超經驗的なものとの交渉いかん、といつのである。これはすべて問題としてはあまりに大きすぎる問題ばかりであり、したがって正しい意味では問題とはならないものである。これをめぐつての討論が何らの焦點を見出すことなく彷徨を續けたのはおそろしく偶然ではなかつたであらう。私見によれば、これらの問題は、經濟のロゴスと歴史のロゴスとの結びつきはいかにあるべきかという觀點からもう一度しぼり直し、集約してみることができらるであらう。歴史的な前後關係と

論理的な前後關係との間にどのような照應關係があるのか、經濟學における古典と現代とを結びつけ媒介するものは何か、こういった問題視角からはじめて問題としての問題が生れてくるであろう。だから私がこの討論の最後になって、私たちに与つての共通の問題は、出口氏がまとめられた五つの問題のうちで第三と第四とを結びつけて考えることだという意味の發言をしたとき、私たちはやっと振り出しに戻った感があったといつてよい。ここには明らかに問題意識の貧困があったのである。

つぎに第二に指摘されることは、個々の資料への内在性の不足ということである。報告は概して一般的超越的に走りすぎている。もっと個々の人間と作品につき、あるいは個々の學說史について、もっと内在的に掘り下げようとする努力が行われたなら、問題意識の貧困はかなり補われたかもしれない。このためにはやはり相當の準備が必要となるであろう。島津亮二氏の報告はこの意味で出席者に訴えるところが多かった。現代の經濟學者はいたずらに *tool maker* である前に *tool user* になければならないという島津氏の發言、この發言にはそれだけとしてみれば異論もありえようが、氏の内在的な努力の中にあつてはきく人を納得させるものがあった。このような報告のし方には今後私たちにとつて學ぶべきものがあるのではなからうか。

戦前戦後の二十年にわたるブランクのうちに、先進諸國における學史研究はどれだけ進んだであろうか。私たち日本の學史

研究家が知りたいことの一つはこれである。學史の研究方法についてどのような變化が現れてきたか。たとえば學史に關するシュンペーターの近業、ロールの經濟學史等々について私たちはどのように評價し、そこから何を學ぶべきか。こうしたことを個々の資料について具體的に研究し、取上げていったなら、私たちの問題意識はもっと鮮明になったであろう。そして共同討論がそのまま共同研究の一環としての役目を果たすことができただであろう。

最後に第三として、私たち日本の學史研究家にとって固有の問題があるように思う。私たちは一體何のために、何を目標として學史を研究すべきであろうか。このような問題は私たちにとりわば自明の前提であるかもしれないが、しかしもう一度あらためて振り返ってみてもよい問題ではあるまいか。誤解を招くことを恐れないであえていうなら、日本の經濟學者には、マルクスもシュンペーターもケインズもそのままでは役に立たないであろう。ところがもし日本の經濟學者たちが、スマスはマルクスでなかった、ジェームス・ステュアートやマルサスはケインズを先廻りしていた、といったようなことに没頭してしまつて、そこに經濟學史研究の方法論があると考えるようなことがあつたとすれば、それは日本の經濟學史研究にとり二重の誤りを強いることになる。二重の誤りとは、第一には、一般に經濟のロゴスと歴史のロゴスとの結合を學史研究のうちに見出そうとしないことからくる誤りであり、第二には、單に公式

主義の安易になれて日本の歴史的現實から目をそむけようとする誤りである。誤解を避けるためにさらに蛇足をつけ加えるなら、早急な評價や論断は研究者として慎まなければならぬことはいまでもないが、このような警戒心と慎重さは何よりもまずわが経済學史研究者の方法論議そのものに對して向けられなければならないと思う。

以上學會の報告としては非常に主觀的印象的なものとなってしまったが、出席者の一人として思ったままをのべて。今後の學會の運営についても多少の参考となることがあれば幸いである。(高島善哉)

二、第二日、自由論題による個別報告は次の通りである。

- (1) 古典派の價值論について——特にリカードを中心として
——
松山 入江 獎氏
商大
 - (2) 西鶴の『日本永代藏』とデイフォウの『イギリス商人大鑑』について——東西經濟思想の二典型
——
一橋 上田辰之助氏
千葉
 - (3) 社會思想史上における司馬江漢
京都 多田 顯氏
 - (4) レーニンの『市場理論』について
大 田中眞晴氏
 - (5) マルクスとスターリン
慶應 氣賀健三氏
 - (6) フランクリンと奴隸制度
尾道 三邊清一郎氏
短大
- 入江氏は古典派とくにリカードの價值論がマルクスの價值概

學會の動き

念とは異なる「購買力概念」であり實物分析がその對象となっていると結論された。上田氏は井原西鶴(一六四二—一九三)とダニエル・デイフォウ(一六六〇—一七三一)という同時代の代表的町人作家をそ上に、元祿商人とオーガスタン商人の生活と思想・理財致富の概念・經濟と宗教倫理・經濟的個人主義と家族主義等につき、原典にてらして比較對照し、當時におけるイギリスと日本との經濟社會と思想の相對比にまで説き進められた。上田氏のこの報告は、問題提起の廣さと新しさ、東西兩洋の思想と生活へのいきいきとした理解、鋭い wit をまじえた論旨の展開において大會參加者の心をひきつけられた。多田氏は、我が國銅版畫の創始者・西洋畫家・いわゆる窮理學者(地學物理學者)としての司馬江漢が蘭學と老莊思想を學び市井の思想家として自然科學的合理思想を導入した漸進的改革者たる重要さを示された。田中氏はレーニンの『市場理論』が當時の具體的問題に迫られつつ『資本論』の中に散在する社會的分業・市場形成の過程の理論化をはたし、その再生産過程分析とともに、『發達』『帝國主義論』へ生かされていることを示された。氣賀氏はマルクスとエンゲルスの史的唯物論は社會の發展についての決定論であり意志の自由と矛盾する。そしてこの疑問に對する解答として、エンゲルスの自由は必然の洞察に存するとの解釋、スターリンが『社會主義の經濟的諸問題』でいう社會法則の認識と利用の説、あるいはシュタムラーの指摘することき上部構造と下部構造の交互作用の説明があるが、これらは唯

物論的一元論としての本質を失わせるものであると断ぜられた。最後に三邊氏は、フランクリンが當時にあって先驅的な奴隷解放運動に進んで行った経過を示され、その思想の社會的基礎を當時のいまだ未熟なりとはいえ發展途上にある北部製造業者の中に求められた。

なお總會において承認された新入會員は一六名、學會員總數は三一四名となった。さらに總會では、三年來進められてきた「古典調査」の経過報告・「年報」發刊準備経過の報告とともに、學會の事業としての古典書醵刻第一回としてベティ著作集がいよいよ刊行の段階にいたったと報告された。(種瀨 茂)

執筆者紹介

- | | |
|-------|-------------|
| 高宮 晋 | 一橋大學教授 |
| 角 政也 | 大藏省理財局經濟課勤務 |
| 菊池 亘 | 一橋大學助教 |
| 松坂兵三郎 | 一橋大學特別研究生 |
| 津田内匠 | 一橋大學特別研究生 |
| 宇津木正 | 一橋大學助手 |
| 高島善哉 | 一橋大學教授 |
| 種瀨 茂 | 一橋大學講師 |